

高校生・大学生のための都市まちづくり研究入門

Chapter 2 a 阪神地域の都市のなりたち 1～地形、水系、外国人居留地前編～

Chapter 2 では、高校生あるいは大学初年次の学生の皆さんに、“まちづくり”を実感し、フィールドリサーチの基本を身に付けていただくため、『都市、環境、エコロジー』から、客野尚志先生の「阪神地域の都市化と生活環境の変化～都市化がもたらしたもの～」をベースに、身近な街々を対象とした“**プラタモリ阪神地区版**”として話を始めましょう。

なお、フィールド・リサーチに関する詳細は『高等学校課題研究ハンドブック』の「Chapter 6 c：リサーチ上級編 3：フィールド調査」、 「Chapter 6 d：リサーチ上級編 4：フィールド調査（続）」などを参考にしてください。

2-1. はじめに

大阪、神戸、そしてそれに挟まれた地域の総称である阪神地域は、特に大正以降に急激な**都市化**が進み、山と海に挟まれた狭いエリアに道路と鉄道が縦横に走り、それを埋めるように住宅地や商業地区が広がり、そして臨海部には大規模な工業地帯が形成され、日本有数の**都市圏**を形成しました。この地区の都市化には他の地域とは異なる特徴があります。その一つは、江戸以前の大都市である大阪、三宮周辺から単純にスプロール状に都市域が広がったのではなく、特に明治以降に国策として発展を遂げた**国際貿易港神戸**の存在があること、そしてその神戸元町に設けられた外国人居留地と、その外国人が持ち込んだ西洋文化や思想がこの地の都市化に大きな影響を与えたことです。

さらに、この地域独自の自然や地形、比較的温暖で晴天が多いこと、また急峻な斜面と海に挟まれた南北に短い平地部、そして斜面から流れ出る無数の**水系**の存在も忘れることができない重要な要素です。そして、これらの自然や地理が発達させた豊かな**農耕文化**とそれに裏打ちされた**酒造**などの産業、さらにその地形や京都や大阪からの距離から、古くから天然の**良港**として発達し、水産業や海外交易の拠点として発展してきた歴史があることなど、無数の要素の時間的な蓄積の中で、多層的に都市化がすすんできたことが大きな特徴といえるでしょう。それでは、主に明治以降のこの地の都市化の様相から解説しましょう。



図 2-1. 神戸外国人居留地のジオラマ、関西学院の創始者 WR・ランバスが最初に滞在した居留地 47 番地付近（神戸市立博物館）

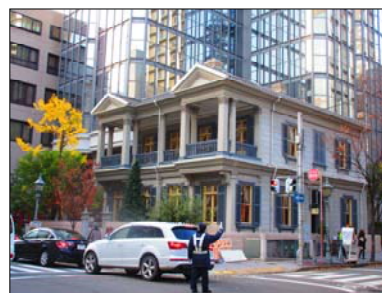


図 2-2. 当時を偲ばせる居留地 15 番地

2-2. 阪神間の近代化以前の姿

阪神地域の地形と歴史

まず、明治の近代化以前のこの地の歴史について簡単に振り返ります。古来より大阪湾エリアは六甲山系から流入する河川が大量の砂を海に供給し、それが時計回り方向の海流

にのり、大阪湾全体に砂州や砂嘴を形成してきたことが知られています。そのことにより、神戸、阪神地域、大阪の臨海部においては複雑な地形が形成され、そのことから天然の良港が形成されてきました。

そして、人々は早い段階からこの地に住み着きました。現在の東灘区、灘区では**縄文時代**の竪穴式住居のあとも見つかっておりますし、西求女塚古墳や東求女塚など古墳も現在に残されています。そしてこの天然の良港を拠点とする海人が形成する村落が古い時代から形成されてきました。これらの海人は都への海産物の供給や軍事面、それから航海上の宗教行事において重要な役割を果たすのみならず、奈良時代においてはすでに当時の海外交易の担い手としても重要な役割を果たしてきたようです。

余談ですが、阪神地域の一部である武庫の地名の由来は、当時の海外交易の拠点の港であった**難波津**からみて、「向こう側」に見えたから武庫とよばれていたといわれています。現在でこそ神戸をして国際貿易港という呼び名がありますが、万葉の昔からこの地域は国際性豊かな港町であったようです。

視点2-1. 昔の地図を探そう、そして現在と比較してみよう！

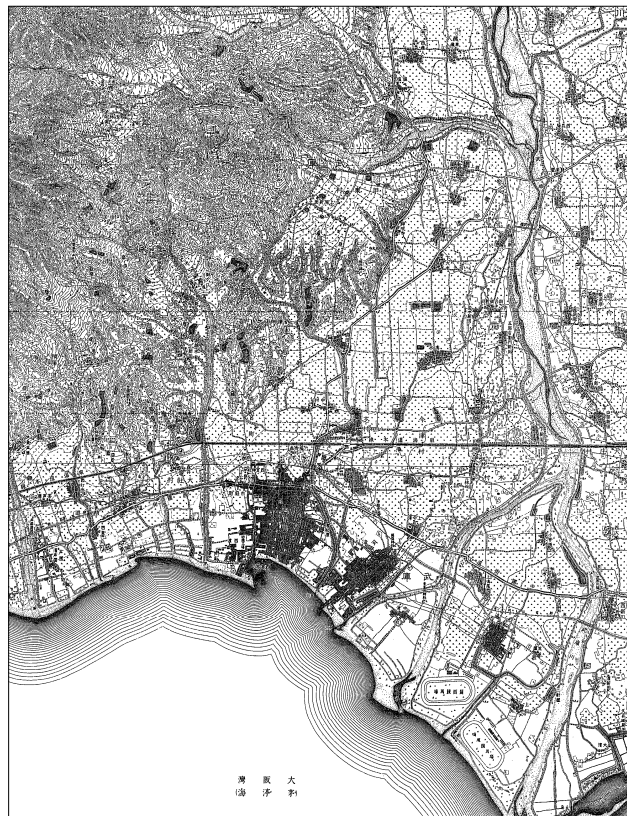
地図は、地域の情報の宝庫です。作成された時代の姿をそのまま固定した“**タイムマシン**”といってもよいでしょう。身近なまちづくりを調べようとすれば、まず、昔の地図を探しましょう。例えば、明治44年の西宮市の地図を調べれば、今は一つの流路にまとめられている武庫川が、河口部でいくつもの支流に別れるデルタ地帯を形成していたことがわかります(図2-3)。そして、大正から昭和にかけて支流などをせき止め、土地を造成し、そこで得た資金で堤防をさらに上流に伸ばしていった様子も想像できるかもしれません。そんな新たな土地に作られた代表的な建築物こそ“**甲子園**”です。それでは、その武庫川改修の現場で働いていた人たちは誰だったのか？ こんなにふうにテーマをどんどん広げていくと、思わぬ世界があなたの前に広がっていきます。

水産漁業について

水産漁業も長らくこの地域において重要な産業でした。江戸時代初期においては現在の灘区、東灘区の臨海部の集落は尼崎藩に所属しており、漁業は海事にまつわる一定の義務を果たす村落にのみ許可され、全ての村落に許可されていたわけではないようですが、それでも全体としては漁業の盛んな地域であったようです。明治期の漁業の記録によると現在の東灘区の漁港にお

図2-3. 1911年当時の武庫川下流、デルタ状に枝分かれし、申川ではまだ水が流れています(その後、廃川跡に甲子園球場が建ちます)。現在のJR東海道線と阪神電鉄は確認できますが、阪急はまだ開業していません。

- この図から様々なことを読みとりましょう。
- ①江戸期からの河川改修を示す“新田”を探そう。
 - ②堤防工事はどのように進んだか、考えよう。
 - ③電車網や道路網はどのように発展したか？かつての街道筋とどのような関係か？
 - ④宅地開発はどのように進展したか？
 - ⑤観光・レジャー施設はどこに設けられたか？



いて、多くの鯛やジャコがとれたことが記録に残されております。そして、漁業により得られた魚を魚肥として活用しつつ、豊かな水系を背景に農業も発達しました。また、現在では近隣の明石での蛸漁、赤穂の製塩が有名ですが、蛸漁や製塩はかつては広く阪神エリアで行われていました。

さらに豊かな農業や水産業、天然の良港という性格から、江戸時代にはさまざまな商品を江戸に送り出す**拠点港**として重要な役割を果たしました。とくに、上質な酒や海産物は江戸においては上方ものとよばれ、大いに珍重されました。同時にこの地の商人たちは、江戸という巨大マーケットをもつことにより、ますます発展を遂げていきます。

水が形成する地域社会と文化

阪神地域の歴史を語る上で欠くことができないのが「**水**」の存在です。この地域における水は、二つの側面から捉えることができます。まず、地域を潤し、灌漑し、生活や産業の源を築いてきた人々の**生活の源**としての水です。もう一つは数多くの水害を引き起こしてきた**脅威の水**です。特に後者は阪神大水害など大きな災害を幾度となく引き起こしてきましたし、地域の人々は常に水の脅威と戦ってきたといえるでしょう。ただ、ここでは紙幅の関係上、前者の地域の産業や生活の基盤となり地域の文化を形成してきた水に注目します。そしてこれらの豊かな水系は都市化に伴い消失し、そして産業や文化の形すら大きく変えたのです。

明治期の阪神間地域の地図をみると、農地が広がりその間を縫うように無数の**水路**が走っている事がわかります(図2-4)。東の水路、西の**ため池**という言葉がありますが、関東地域では河川を水源とする広大な水路ネットワークが形成され、それが地域を灌漑してきました。その背景には、利根川等大規模な河川が多くある事、そして関東平野には広大な平地が広がっており、ため池をつくるには地形が不適当であり、むしろ水路をつくることの方が容易であったことがあげられます。それに対して、関西は主にため池を水源として灌漑が進められてきました。山地が多く、地形も急峻であった近畿の多くのエリアでは谷をせき止め、ため池をつくり、そこから水を引く事が多く見られました。過去の地図をみると、三田や明石、神戸北区、西区付近には数多くのため池がみられますが、阪神地域にはそんなに多くは見られないことがわかります。むしろ、東西に長い六甲山から流れ出る無数の水系をうまく利用しながら水路網を作り出して、これを灌漑や様々な産業に活用してきたようです。



図2-4. 大正期の灘区周辺地図(陸測図)。溜め池が少なく、無数の水路が走っています。

水がもたらした地場産業

さて、明治期の地図をみればわかりますが、この地方では多くの**水車**がありました。急峻な六甲山から流れ出る川は水車を動かす格好の動力源だったのでしょう。これらは油絞りや米つきに用いられました。そしてこれらに使用される石臼の材料として六甲山から得られた花崗岩が使われ、まさに**地産地消**を体現していました。実はこの地域はかつて水車業や酒造が盛んであり、その経済力に着目して、岩屋や大石が後に幕府領とされた経緯が

あります。また新田開発も盛んに取り組まれました。江戸時代に水車により絞られる菜種油は特にこの地域の代表的な産物でした。材料となるアブラナは米の裏作として盛んに栽培されました。現在もその名残を残す地名（たとえば、水車谷とか水車新田など）が残されています。

またこの地は素麺の産地としても有名でしたが、それにはやはり水車を用いた小麦製粉が背景にあります。明治期に入り素麺製造はますます盛んとなったことが記録にのこされています。しかし大正時代となり電力が普及し、前近代的な水車業が衰退していきました。これに伴って、アブラナを材料とする製油、素麺の製造なども衰退していきました。今では素麺といえば播州の方が有名ですが、かつてはこの地が一大産地だったとは不思議ですね。現在では水車はほとんど残されていませんが、西宮の夙川付近に唯一過去の水車が保存されているものがありますので、関心があれば見にいかれてもよいでしょう。

さて、阪神間といえは歴史的にも**酒造業**が盛んで、とくに灘五郷¹としてその名を広くとどろかせていますね。記録によると、享和3年（1803）には、大石で25軒、新在家で24軒、岩屋で9軒と灘だけで60軒の造り酒屋があったとされています（灘区80年史編集委員会編（2011）『灘の歴史』）。その背景には、近隣に米の産地があり良質の酒米を得る事ができたことがあげられます。筆者が勤務する三田でも山田錦という酒米の栽培が当時から盛んであり、現在でも多く栽培されています。また、杜氏のなり手が多かったこともその一つの理由でしょう。阪神間地域からそう遠くない丹波地方から農閑期に杜氏として灘に出稼ぎに行くものも多くいたそうで、大変腕が良かったと伝え聞きます。

そしてなにより豊かな水です。いうまでもないことですが酒造にはよい水が多く必要とされます。六甲山の花崗岩により濾過された水は当時から名水としてしられ、酒造にも適していました。そして、精米に水車の動力が利用できたことも大きな要因です。人力と比べるとはるかに効率的で、コストも安いので盛んに利用されました。そして、天然の良港の存在です。生産された酒は盛んに江戸に送られました。特に上方の酒は品質が高く江戸でも大変評価されました。**摂津十二郷酒造仲間**という組織が18世紀後半に組織されましたが、これには大坂、伝法はじめ池田や伊丹、尼崎、西宮、兵庫、灘等の生産者が加入していたことから、この地域が一大酒造拠点であり、阪神地域のみならず大阪や京都などでも広く盛んに酒造がされていたことが分かります。現在でも西宮や灘の南部に酒造会社が見られますが、それはこの時代の名残なのです。

（後編に続く）

視点2-2. 地元の産業の移り変わりを調べよう！

この Chapter をお読みになれば、“**地場産業**”も移り変わりが激しいのがわかるでしょう。江戸時代、酒造業は伊丹周辺から灘五郷に移りますが、それは原料としての“宮水”もさることながら、灘周辺の水車による精米も重要だったとのことです。この頃、“水”は物資の輸送や、新田開発にも欠かせませんでした。現在、関西学院大学がたっている“上ヶ原台地”は、江戸時代初期、仁川の上流から水をもたらず仁川用水ができるまで、田畑も開けない場所だったのです。その一方で、江戸期に氾濫原に田畑や“まち”が広がった結果、洪水による被害もまた拡大していきます。

¹ 神戸市の東灘区・灘区から西宮市にかけての西郷、御影郷、魚崎郷、西宮郷、今津郷からなる土地。酒米や地下水（宮水）が取れ、酒造に適した気候であったり、製品の輸送に便利のため、酒造が盛んになります。